
1月23日～夕暮れの教室～

p p

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1月23日～夕暮れの教室

【Zコード】

Z3894A

【作者名】

pp

【あらすじ】

男子と女子が対立しているため、日常生活に異性と会話のできないような環境の小学校に通う由希。ある日、卒業文集作文が書き終わっていないために男子2人と居残りにされて・・・。

(前書き)

この小説は短編ですが、シリーズのように同じ設定の小説を作つて
いく予定です。

1月23日。由希は卒業文集の作文が終わっていないため、居残りをしていた。由希のクラス（6年1組）には、他にゴンタ（本名は小野 勇治）とミッキー（本名は光石 和哉）が残っていた。

由希はとても作文なんて書く気にはなれなかつた。指でシャーペンをくるくる回して遊んでいると、背後で鈍い音がした。

「あつあつ！・・・・・いけねつ！」

ゴンタが叫んだ。振り向くと、掃除道具ロツカーの上につんでいたダンボールが、すべて落ちていた。

「だからやめとけって言ったのに・・・。」

『しかたがないなー』という顔をしてミッキーが言った。

掃除道具ロツカーの前には、サツカーボールが転がっていた。どうやら、ゴンタはこれをロツカーに向かつて蹴つたらしい。

「お、おい星野。先生にチクるなよ！…」

半分笑いながらゴンタ言った。しかし、ミッキーは青ざめている。

由希は何だかワクワクしてきた。男子と女子が会話をすることは、6年生の間では許されないのだ。

「つこつこ田でないと、男子と話すチャンスなど全くない。

「はいはい、言いませんよ！それより、何か面白いことない？ヒマで死にそう。」

由希はもとから先生に言いつける気なんてなかつた。男子はバカのまづが面白いのだ。

4時になつたら家に帰れる。それまで遊んでいれば作文は家で書いて来れるのだ。

ゴンタはミッキーを無理矢理引つ張つて由希の前に来た。

「ん~じゃあ、『イツの好きな人教えてやるよ。』

「や、・・・やめろつ。バカつ！」

ミッキーの顔が真つ赤になつた。ゴンタは、ミッキーの本当に好き

な人を知っているらしい。

本人は言つてほしくないようだが、由希は聞きたくてしかたがなかつた。

「本当？教えて！」

その一言がミツツーにとどめをさした。

ゴンタが口を開いた瞬間、ミツツーは魂が抜けたような顔をした。

「コイツの好きな人はな、篠宮なんだぜ！」

由希は大笑いした。篠宮 明田実は、6年生でも指折りのモテる女子だ。

でも、それ以上からかつたりいじめたらかわいそうだと思ったから、

由希は

「大丈夫だよ、ミツツーはスポーツ得意だろ？ スポーツ万能はモテるんだぞ？」

と言つた。すると、ミツツーの顔がもともとにもどつた。

「・・・ふつ。」

ゴンタが笑つた。目は由希を見ていた。

「そのコイツが好きなやつはお前か？」

幼稚じみた笑いだ。

「バーカ！ アタシには好きな人がいますようだ！」

そう軽くきりかえすと、ゴンタの目が輝いた。

「教えてくれよ！」

幼稚ではなかつたが、やんちゃぼうずのような言い方だつた。

「やなつこつた。誰がアンタなんかに・・・。」

そう言つと、ゴンタが手を合わせて言つた。

「じゃあ、どんな人がタイプ？ それだつたらいいだろ？」

由希はそれくらいならいいと思つて、

「勉強がてきて、外見が悪くはない人かなあ。それから、やさしい人！」

と言つた。これくらいで誰が好きかがわかつたら、たいした頭をしているはずだ。

よりによつて「ゴンタのよつなバカがわかるはずない。

「ん~。・・・わかつた! まつくんだ!」

まつくん=松林 直紀。頭が良くてす"くまじめ。先生と友好的で、顔は悪くない。母親はハーフ。

由希はびっくりした。図星だったのだ。「勘の鋭いやつ~!」 そう思った。

「ち、ちがう! ちがうよ!」

あわてて言つたから、図星なのがまるわかりだつた。

「はは~ん。図星だな~。」

ゴンタが意地悪く言つた。「バレた~!」

普通だつたらショックなはずなのに、何だかうれしかつた。ゴンタは、何だかフレンドリーな感じがするのだ。

「あ、4時だ。星野、もういいよな?俺達はもう帰るからな。」

ゴンタはそう言つなり、ダンボールを元通りに直し、ランドセルを持って教室から出て行つた。

由希は教室に取り残された。

「私もそろそろ帰るかあ~。」

由希は大きなのびをして、ランドセルを背負つた。窓からゴンタが見えた。ミッキーと一緒に。

由希は微笑んだ。

「ゴンタ・・・。ちょっと、好きなんだよね・・・。」

振り向いてロッカーを見ると、紅い夕日が教室の後方にあたつてきれいだつた。

「・・・きれいだなあ。ゴンタも見たのかな?」

そつ言つて教室を出た。校舎も紅く染まつていた。

「さつさと帰るか!」

由希は走りだした。

がバレた。なんとなく不思議な感覚がした。

』

END

(後書き)

「こんにちは。ピアーナモです！小学生なので、文章力もまだまだで読みにくいところもあったと思いますが、どうかそこは見なかつたことに・・・。
よろしければ感想お願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894a/>

1月23日～夕暮れの教室～

2010年10月17日09時09分発行